国立国際医療センター広報誌

NCGM PRESS

JIHS
Japan Institute for Health Security

Vol.16

NORIHIRO KOKUDO

理事長
國土 典宏

理事長インタビュー

国立健康危機管理研究機構「JIHS」発足。

HIDEYO MIYAZAKI

病院長
宮嵜 英世

病院長インタビュー

平時は最善の総合診療を提供、有事には健康危機にも対応

NCGM
National Center for Global Health and Medicine

国立健康危機管理研究機構「JIHS」発足。感染症対策と医療研究の新たな司令塔へ

NORIHIRO KOKUDO

理事長

國土 典宏

2025年4月1日、「国立健康危機管理研究機構（JIHS：Japan Institute for Health Security）」が新たに設立されました。JIHSは、これまで感染症研究の最前線を担ってきた国立感染症研究所（感染研）と、国際医療をリードしてきた国立国際医療研究センター（NCGM）が統合して生まれた組織です。

JIHSの使命は、「感染症やさまざまな疾患に関する調査・研究や医療提供を通じて、安心できる社会の実現に貢献する」ことです。世界トップレベルの感染症対策をけん引する『感染症総合サイエンスセンター』を目指し、基礎から臨床、疫学、公衆衛生まで、幅広い分野を横断的に結びつけて研究・医療を進めていきます。また、JIHSの二つの総合病院はこれまで以上に高度先進医療を推進するとともに地域医療にも貢献いたします。

長い歴史がつながり、今へ

ＪＩＨＳの背景には、日本の医療や感染症対策の歴史を築いてきた２つの組織の歩みがあります。

旧感染研のルーツは、１８９２年、北里柴三郎博士が創設した「私立衛生会附属伝染病研究所」です。彼はドイツで細菌学の大家コッホに師事し、破傷風菌の純粋培養やペスト菌の発見など、世界的な功績をあげました。私立衛生会附属伝染病研究所は伝染病研究所（伝研）、国立予防衛生研究所（予研）を経て、１９９７年に国立感染症研究所となりました。伝染病研究所には、梅毒スピロヘータの純粋培養に成功した野口英世先生、赤痢菌を発見した志賀潔先生が入所しています。

一方の旧ＮＣＧＭは、１８６８年の戊辰戦争で設置された「兵隊仮病院」に始まり、東京陸軍病院、国立東京第一病院を経て、１９９３年に国立国際医療センター、２００８年に国立国際医療研究センターとして生まれ変わりました。旧ＮＣＧＭの名誉総裁には森林太郎（鷗外）先生がいます。

近代医学の礎を築いた偉人たちの足跡が、今のＪＩＨＳに受け継がれています。

JIHSの4つの柱

1 感染症情報の収集と分析

旧感染研に早い時期から発足していた緊急時対応センター（EOC）が、平時・有事を問わず、世界中から感染症に関する情報を収集・分析します。JIHSには、感染症の発生や病原体と感染症、社会的インパクト、研究開発に関する情報を集めて分析と評価を行い、政府や厚労省、関係各省に提供して、政策決定に利用していただく役割があります。

2 研究開発と臨床試験

JIHSはリスクを評価して重点感染症を指定し、基礎研究から応用、開発の研究基盤を整備し、薬事承認まで一気通貫で貢献できる組織を目指しています。

旧NCGMは、コロナ禍で臨床情報を収集するデータベース事業COVIREGI-JPを立ち上げ、旧感染研と共同で新興・再興感染症データバンク事業（REBIND）に発展させました。REBIND事業は、2024年に発足した感染症臨床研究ネットワーク事業（iCROWN）で引き継いでいます。iCROWNの特徴は、電子カルテの情報をできるだけ自動的に集めて、有事の際に研究開発が迅速にできるネットワークづくりです。

3 高度で総合的な医療提供

JIHS国立国際医療センターは43の診療科、781床の総合病院で、年間に約1、1000件の救急搬送を受け入れ、救急医療にも力を入れています。JIHS国立国府台医療センターは20の診療科、417床を有し、精神科と児童精神科の病床が多いのが特徴です。

JIHSは、合併症がある新型コロナウイルス感染症の重症患者の治療で必要とされた、総合病院機能を強化する方針です。

4 人材育成と国際連携

JIHSでは、旧組織時代から人材育成に力を入れており、全国の医師を対象とした「NCGM感染症専門医フェロー」では22名が研修を修了、「FETP（実地疫学専門家育成プログラム）」では128名が現場対応力を養い、新型コロナ対応でも活躍しました。「IDES（感染症危機管理専門家育成プログラム）」では、WHOやCDCなど国際機関でも研修を行い、約30名の医師が修了しています。

最近では、厚労省委託の「IDCL（感染症危機管理リーダーシップ研修）」を開始し、地域の行政官の育成にも取り組んでいます。また、災害医療を担うDMATの事務局もJIHSに移管され、感染症や災害など広範な緊急対応体制を整備しています。

国際連携では、J-GRID+を2024年に始動し、日本の大学10校と海外11拠点とで研究協力体制を構築。アジア各国にARISEネットワークの連携拠点を整備し、PMDAや国立がん研究センターと連携した地域ネットワークも準備中です。

さらに、JICAとの連携や7つあるWHO協力センターの機能も引き継ぎ、国際医療協力の活動を継続して参ります。

「1+1」が「2以上」になるような組織を目指して

JIHSは、単なる組織の統合ではありません。主に2つの旧組織から成り立ちますが、これまで別々のフィールドで活躍してきた知見や人材を融合し、1足す1が2以上となる相乗効果（シナジー）を生み出すことを目指しています。コロナ禍では十分にできなかった役割も、JIHSのもとでよりスムーズに力強く担い、さらにプラスアルファを生み出したいと思います。

JIHSは、信条のように「常に世界的な視野で、強くしなやかに、革新的に、公正かつ誠実に、高度な専門性に基づき」職務を果たし、歩みを進めてまいります。

さらに詳細まで！インタビュー記事全文はこちら
https://press.medigle.jp/doctor-interview/71.html

国立国際医療センター

平時は最善の総合診療を提供、有事には健康危機にも対応

HIDEYO MIYAZAKI

病院長

宮嵜 英世

国立国際医療研究センター病院は、国立国際医療研究センター（ＮＣＧＭ）の事業部門の一つとして活動してまいりました。今回、国立感染症研究所と統合され、国立健康危機管理研究機構（ＪＩＨＳ、ジース）としてスタートするのに伴い、「国立国際医療研究センター病院」は「国立国際医療センター」と名称を変更いたしました。よって、当院の正式名称は、国立健康危機管理研究機構　国立国際医療センターと長い名前になりましたが、今まで通り「医療センター」、「国立国際」、「ＮＣＧＭ」などと呼んでいただければ幸いです。ちなみに病院の英語名はNational Center for Global Health and Medicine（ＮＣＧＭ）となります。

新機構のロゴは、ＮＣＧＭのロゴからＪＩＨＳのロゴへと変更されましたが、ＮＣＧＭのロゴ自体は当院のロゴとして継続的に使用していくことになりました。引き続きよろしくお願い申し上げます。また新機構および病院のホームページについては今後もっと見やすくなるように改変していく予定です。

組織は拡大、医療・研究・国際協力を横断的に連携

ＪＩＨＳには、臨床・研究・教育・国際協力など多岐にわたる機関が統合されました。臨床分野では、当院と国立国府台医療センターの2病院、研究分野では国立感染症研究所と国立国際医療研究所、さらに臨床研究センターが機能を担います。人材育成・国際協力の分野では、国際医療協力局や国立看護大学校が関わり、ＤＭＡＴ（災害派遣医療チーム）事務局も加わりました。多様な専門性を結集したこの新しい枠組みの中で、当院は特定機能病院としての使命を果たし、社会に貢献してまいります。

「いつも」と「もしも」の両方に応える医療

当院では、平時には幅広い疾患に対応する総合診療を提供しながら、有事には感染症の拡大や災害などに即応できる柔軟な対応力を備えています。感染症、救急、集中治療、災害医療の分野で、日頃から備えを重ね、突発的な健康危機にも対応可能です。

また、年間1万件以上の救急搬送を受け入れる救命救急センターを中心に、国際感染症センターや糖尿病総合診療センター、エイズ治療・研究開発センター、国際リンパ浮腫センターなど、特色ある診療部門がそろっています。さらに、ハイブリッド手術室による先端手術や、希少疾患である腹膜偽粘液腫への高度治療も行っています。

がん・国際診療など多彩な専門領域にも注力

がん診療にも力を入れており、地域がん診療連携拠点病院として、手術支援ロボット「ダビンチＳｉ」2台を活用した低侵襲手術を実施。がん総合診療センターでは、ゲノム医療、外来化学療法、緩和ケア、ＡＹＡ世代（思春期・若年成人）への支援など、多面的な取り組みを展開しています。また、国際診療部を設け、外国人患者の診療にも積極的に取り組んでいます。ＪＭＩＰ（外国人患者受け入れ医療機関認証制度）の認証も取得しており、多言語・多文化への対応力を備えた医療提供を行っています。

研究と臨床をつなぐ、未来志向の医療づくり

当院は、研究所や臨床研究センター、国際医療協力局との連携により、国際水準の臨床研究や医師主導の治験を推進しています。臨床現場と研究が密接に結びつくことで、エビデンスに基づいた新しい医療を創出し続けています。

私たちは、高度急性期医療と研究機能を両立させる総合病院として、地域と全国の皆さまの健康を支え続けます。今後とも、連携医の先生方や医療関係者の皆さまのご支援を、どうぞよろしくお願いいたします。

WEBでも記事をご覧いただけます！
https://press.medigle.jp/doctor-interview/72.html

新任科長・医長のご紹介

2024年に東大から国立国際医療センターへ異動し、2025年4月から呼吸器外科（胸部外科）の診療科長を拝命することとなりました。2019年以降、当院は新型コロナウイルス感染症の最前線として多くのコロナ患者さんの診療を行ってきた影響で通常の呼吸器外科診療については規模を縮小せざるを得ない状況が続いておりましたが、お陰様で近年はコロナパンデミック以前の診療体制に戻すことができております。当科では、肺・縦隔・胸膜・胸壁の疾患に対して幅広く外科治療・診断を行っており、他院では対応困難な炎症性肺疾患（結核、非定型抗酸菌症、肺アスペルギルス症など）に対する治療も呼吸器内科と協力して積極的に行っております。未診断の肺結節、気胸、膿胸など、電話でも結構ですので、当科にお問い合わせいただけば柔軟に対応させていただきます。今後とも何卒宜しくお願い致します。

胸部外科　診療科長

長野 匡晃

MASAAKI NAGANO

資格

■日本外科学会 外科専門医/指導医　■日本呼吸器外科学会 呼吸器外科専門医
■日本呼吸器内視鏡学会 気管支鏡専門医

当院心臓血管外科はあらゆる成人の心臓および血管疾患に対応しています。長寿社会の本邦にあった術式の選択を、患者様のライフタイムマネジメントを考えた治療を行っております。例えば、大動脈弁置換術では弁輪拡大を伴う生体弁置換を行うことにより弁劣化に伴う再手術の際にTAVIを安全にできる初回手術を選択しています。また急性大動脈解離では下行大動脈の偽腔が開存していれば全弓部置換術を、腹部大動脈瘤では安易にステントグラフト術を選択せず可能であれば開腹人工血管置換を行い、再治療を回避するように努めています。その一方で患者様の年齢、併存症、既往歴を考慮し、低侵襲手術やステントグラフト術を適切に行っています。バスキュラーアクセスや下肢静脈瘤から末梢動脈、心臓大血管手術まですべての領域で高水準な医療が提供できるよう努めてまいります。

心臓血管外科　診療科長

田村 智紀

TOMOKI TAMURA

資格

■日本外科学会 外科専門医　■三学会構成 心臓血管外科専門医/修練指導医
■日本循環器学会 循環器専門医

令和7年4月から循環器内科医長を務めることになりました山本正也と申します。専門は冠動脈疾患、下肢閉塞性動脈硬化症に対するカテーテル治療です。当院は3次救急を担う高度救命救急センターがあり、心原性ショックへの補助循環装置を用いた集中治療から、あらゆる診療科をもつ総合病院のため、心臓サルコイドーシス、アミロイドーシス、がん治療関連心機能障害など幅広い循環器疾患に対応することができます。また冠動脈疾患への高度なカテーテル技術、不整脈に対するカテーテルアブレーション、デバイス治療（リードレスペースメーカ、植込み型除細動器、心臓再同期療法）の提供が可能です。これまでの豊富な臨床経験を活かして、患者さんに安心、安全に最適な治療を受けていただけるよう尽力いたします。どうぞよろしくお願いいたします。

循環器内科　医長

山本 正也

MASAYA YAMAMOTO

資格

■日本内科学会 総合内科専門医　■日本循環器学会 循環器専門医

2025年4月1日付で中央検査部門の臨床検査室医長を拝命致しました、満尾晶子です。専門分野は膠原病・リウマチ内科です。
中央検査部門の一つに臨床検査室があります。臨床検査は、検体検査といって患者さんから採取した血液・尿などを分析装置で調べる検査と、生理検査といって心電図・呼吸機能・超音波など体の働きを直接調べる検査の２つに大別され行っています。検査精度管理やリスクマネージメントも行います。
私は1994年に新潟大学医学部を卒業、当院で初期・後期研修を行いました。その後、順天堂大学膠原病内科で診療・研究に従事。2013年に東京都立川市にある災害医療センター膠原病・リウマチ内科の常勤医となり、同科外来・入院診療を立ち上げました。血液検査の白血球血液像において、好酸球比率増加時のパニック値設定にも関わりました。ご縁あって当院に戻り、主に臨床検査に関する業務と、膠原病や関節リウマチ患者さんの外来診療を行います。
臨床検査科は、すべての診療科と風通しを良くすることが大事だと考えます。患者さんから信頼される医療を支えるために、今後も努力したいと存じます。何卒宜しくお願い申し上げます。

中央検査部門
臨床検査室　医長
満尾 晶子
AKIKO MITSUO

資格
■日本リウマチ学会 リウマチ専門医　■日本内科学会 総合内科専門医

2025年4月から産科医長を拝命しました中西美紗緒です。これまで周産期医療を中心に、腹腔鏡手術やロボット支援手術、婦人科腫瘍の診療、臨床研究などに携わりながら、女性のトータルヘルスケアの実現を目指して取り組んでまいりました。当院では、出生前検査や胎児超音波外来、無痛分娩、産後ケアなど、妊産婦の方々のご希望や状況に応じた安全で安心できる医療の提供に努めております。助産師や看護師をはじめとするスタッフと協力し、チーム一丸となって引き続き尽力してまいります。また、ハイリスク妊娠や合併症を伴う妊娠においては、新生児科や関連診療科、手術部門と密に連携しチーム医療を実践しています。女性の皆様が抱える悩みや不安に寄り添い、少しでも安心して過ごしていただけるようなチーム・環境づくりを大切にしています。どうぞよろしくお願い致します。

産科　医長
中西 美紗緒
MISAO NAKANISHI

資格
■日本産婦人科学会 産婦人科専門医/指導医　■日本周産期・新生児医学会 周産期(母体・胎児)専門医/指導医
■日本超音波医学会　超音波専門医/指導医

はじめまして、この四月よりペインクリニック診療と手術麻酔管理を担当させていただくことになりました武田昌子と申します。ペインクリニック診療科では、様々な原因によって発症した痛みを緩和・治療することを目的としています。椎間板ヘルニアや脊柱管狭窄症などの脊椎疾患による痛み、帯状疱疹関連痛、三叉神経痛、外傷や術後の慢性疼痛などがあります。痛みの程度や性状により神経ブロック治療、非侵襲性の偏光近赤外線照射治療、内服薬治療を行いながら必要時は他の専門科医師に併診いただきながら治療を進めてまいります。痛みは放置していますとだんだん程度が強くなることがあります。特に帯状疱疹の痛みは残ることがありますのでお早めにご受診いただければと思います。今後とも手術麻酔管理、ペインクリニック診療に尽力させていただきたく思っておりますのでどうぞよろしくお願い致します。

ペインクリニック
内科医長
武田 昌子
MASAKO TAKEDA

資格
■日本麻酔科学会 麻酔科専門医/指導医　■日本ペインクリニック学会 ペインクリニック専門医
■東京大学大学院医学系研究科博士課程修了 医学博士

JIHS Japan Institute for Health Security
www.hosp.jihs.go.jp/index.html
国立国際医療センター
発行：国立健康危機管理研究機構　国立国際医療センター
病院広報管理部門
発行日：2025年5月
NCGM
NCGM PRESS Vol.16

人間ドックセンターのご案内

長い歴史をもつ当人間ドックセンターは、その歴史と経験に基づき、お客様からの安心と信頼をいただいており、その期待にお応えできるよう全スタッフが心を込めてお迎えしております。施設内は広めのフロアでゆったりとしており、スムーズに検査を受けていただけることはもちろん、病院の専門診療科とも常に連携を取っており、ご病気が発見された際には、迅速に専門診療科へご紹介しております。
また当院の特徴として、胃と大腸の内視鏡検査が同日に行えるコースや専門診療科とタイアップしたコース、PET-CT検査などの様々なオプション検査をご用意しており、皆さまの生活習慣や既往歴などに合せて、ご自分でご自由にお選びいただけます。
日帰りコースだけではなく、ご宿泊コースもご用意しており、お部屋からの夜景やお食事を楽しみながら、時間にゆとりをもって検査をお受けいただけます。

医学研究の発展と優れた人材の育成のために

当センターは、センター病院・国府台病院という2つの診療拠点に加え、研究所・臨床研究センター・国際医療協力局および国立看護大学校を擁し、高度総合医療を提供するとともに、特に感染症免疫疾患ならびに糖尿病・代謝性疾患に関する研究・診療を推進し、これらの疾患や医療の分野における国際協力に関する調査研究および人材育成を総合的に展開しております。
当センターの活動を推進し、使命を十分に果たすためには、その活動財源を安定的・多面的に確保することが必要不可欠です。課せられたミッションを実現して国民の皆さまに成果を還元するための財源に関して、企業や個人の皆さまからの寄附によるご支援をお願いいたします。
何卒、当センターの寄附の趣旨にご理解頂き、お力添えを賜りますようお願い申し上げます。

患者支援アプリ導入のご案内

3月26日より、患者支援アプリ「Wellcne（ウェルコネ）」を導入しております。お手持ちのスマートフォンにインストールし、登録の お手続きをいただくことで、診察待ちの状況や、外来の予約の確認などができるようになります。

- 診察待ち順案内が届きます
- 受診予約が確認できます
- 医療情報の確認が可能となります。
- アプリ決済(後払い会計) が可能
- 院外処方箋の送信が可能です。

国立健康危機管理研究機構　国立国際医療センター
〒162-8655 東京都新宿区戸山1-21-1
TEL 03-3202-7181　　https://www.hosp.jihs.go.jp/index.html

地下鉄を利用の方

都営地下鉄　大江戸線　若松河田駅(河田口)から徒歩5分
東京メトロ　東西線　早稲田駅(2番出口)から徒歩15分

都営バスをご利用の方

新宿駅から(宿74系統) 医療センター経由女子医大行き
「国立国際医療研究センター前」下車　徒歩0分
大久保・新大久保から(橋63系統) 新橋行き
「国立国際医療研究センター前」下車　徒歩0分
市ヶ谷・新橋から(橋63系統) 小滝橋車庫行き
「国立国際医療研究センター前」下車　徒歩0分
都営飯田橋駅前(C1またはC3)から(飯62系統)
牛込柳町駅経由小滝橋車庫行き
「国立国際医療研究センター前」下車　徒歩0分

診療時間

外来診療時間　8:30〜17:15
初診受付　　8:30〜11:00

※休診日や完全予約制を設けている診療科もありますので、必ずホームページをご覧ください。